

CATALOGACIÓN: Álbum de grabados nº8

Signatura: J-C/7

Artista principal: UTAGAWA YOSHIKU

Fechas: 1867

Tema principal:

- *Musha-e* (Guerreros)

Nº de estampas: 82



山今亭有人記

一惠齋芳幾筆



太平記英勇傳

竹中半兵衛重治

濃州の住人齋藤の壺下より信長
 美濃と併呑せんとすれど重治有つて
 謀りて後國を討つて山林の
 隠れ所となりてむ秀吉
 住く治と論じ竟ふ
 謀て軍師とす
 重治御知
 言ふこと
 るく意を
 授けし秀吉
 吉とすす
 功を思ふと少くも穴
 天正五年秀吉と俱ふ
 中國の起り備備二州と
 定め同し七年三木の陣中
 於て病み死す京に帰つて醫科を
 業としし重治のつて幸
 歎地も死せんとすは神中も
 死せり秀吉嘆惜して孤子重治を
 撫育し後三方石を賜ひ丹後守に任じ



No. 1154

太平記英勇傳

木森

三左門

可成

信長の合身信
 治を補て江州
 佐和山
 在り

浅井朝倉石
 山門徒通
 兩軍合て九十有
 余三隊かたしを青
 森に城の中
 色多し可成に恐
 討取て於小路上
 討取て於小路上

弄存

朝霞横芳幾画

廣幸

七十六



七

太平記英勇傳

加藤左馬之介嘉明

三州岩崎の住人加藤嘉明の男秀吉ははやく
軍功をたつての邊は、戦々嶽の淺井吉兵衛と
争取後天正十四年仙石秀久と
俱ふ九州へ使者に秀久を尋せ
破つて志津家久とさうふ

長子 管我 部信親
以下多く討死つたを
獨り嘉明秋坂を治と
かど健闘して退つた又
朝敵の爲の戦軍に敵船數十艘
東取陸の清正行長を身一と
海小の嘉明を身一とほらふ



太平記英勇傳

貴田孫兵衛統治

豊前の國彦山の麓毛谷村の農夫
怪力無双にて御道不達を豊公召ぬ
に統治の曰く自己に神の告あり力量
増し者の臣下とさうん足ふあつて
小倉の御陣に陣取り勇士といは
統治と角能と傲をた木村
又藏つてに後とさうり透ふ
加藤清正の臣とさう後朝辨
フランカイの入て森本と先
登と幸以技藝一を敵の
先將と討つて人さうし
その身金銀より

多勢のさ先に
討死する名を
後代にさうさう



太平記英勇傳

高山右近友祥

御の荒木村重の麾下下りて
信長に屬して戦功最多し山崎
の戦中中川清秀と奮々
先鋒に當り其功
績を出せ給
七君の



意とる
盛政の猛威に
懼と秀長の本陣に
走りて日頃の武勇を
公氣を死のうらみ秀吉
深く殊に明支丹信仰を
名に左枝利家に預け
後後異國より運致せり

寺尾亭有人記 五三 朝露楼芳幾画 廣幸

太平記英勇傳

山今亭有人記 一惠齋芳幾筆 廣幸

七十五

長曾

我部

弥部

三郎

信親



信親の長子にして
隆恩とも父の如き大將の
城在りて行綱を説く服一木城に赴て父を進め
秀吉に成りて土佐一國を治る聖天正十四年仙石秀久の

副侯とて九州に
赴り利光川の戦ひに
分利の勇とて
竟ふ利軍を討死せしを
豊公殊に之を
めりて

太平記英勇傳

竹筒井陽舜坊煩慶

竹筒井陽舜坊煩慶の傳記は、其の勇武と忠節を記す。其の略は、天正八年、信忠の先鋒として志願し、多門の兩城を攻拔せり。大和國を領し、原末武智智光秀との斷撃の友となり、光秀志を得ず、煩慶意を西端の計し、其臣友之謀めり、光秀を討て、夫して秀吉を從ひ、諸軍功あり、病死の後、其子定次不行跡にして國家を失ひぬ。



太平記英勇傳

櫻井佐吉

江州駿ヶ嶽の役に、秀吉美濃より、北軍を破るに、秀吉を助け、指揮の下、櫻井佐吉、真光を連、敵軍を破る。見、宿屋七郎左門、櫻井目、分突、宿屋、無数の勇士、多色、櫻井、己に危、宿屋、助、右、工、門、彼、心、宿、屋、を、突、か、し、退、き、り、の、と、せ、來、つ、て、櫻、井、佐、吉、を、討、つ、て、首、を、取、り、て、



弄存亭有人記

朝家樓芳幾筆



太平記英勇傳

松田尾張守

小田原北条家
 第一の老臣
 兼備の士
 長子笠原新八郎と謀
 主家を倒潰して關左
 八州を掌握するを
 會々坂部岡田雪
 秀吉と和を進めしを
 松田は之を激しく
 味方なきに打りて今も
 小田原城に居り松田父子
 時と期を待ちて松田政を
 及忠候さんと甘しを勇馬金
 誠志の輝くは後秀吉その
 逆を憎んで誅せんとす人ぬ



弄舟亭有人記

山今亭有人記 十九一惠齋芳幾筆



朝露樓
 芳幾筆

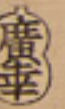
十八



太平記英勇傳

松下加兵衛之綱

今川家の謀士秀吉はト先
 之綱には元初陣と一々
 北条の先將伊東日向守
 と討つるも義元大に
 疑懼はし之綱小の
 賞につく秀吉に
 其沙汰は遠く
 於て秀吉駿州
 せしむ之綱も
 又義元のくちを
 責とせられ義
 元陣没の後へつ
 氏真を扶と浪人
 清公員とすしと晩年天正
 十七年秀吉小田原陣
 せしめて丹州舟坂とす



太平記英勇傳

武田勝頼

伊奈四郎と号し信士遺命
 著く勝頼の子太郎信勝
 と家嫡とす
 勝頼とて
 國吏ヤ主
 らしむ勇
 猛比さう
 とりへる

性昏愚はそ
 邪を信し正を
 來りか罪明は
 時の福島の城主
 本善義賢勝頼とらんて
 安土内通と信長大軍と辛く
 信州に亂入し彼城と侍と勝頼新附人にて
 先陣んまを謀を信勝使る今を親き國つら
 避て何國へ往らん唯死す天目山の起つ從者相く
 早今入勝頼比めく大敗長岡の女を悔内藤土屋ホカ
 志を幽し奮に自裁し果つるこそ



弄存亭有人紀

朝家横芳炭画



太平記英勇傳

安田作兵衛國次

光秀中國援兵と
 号し々々出陣し
 洛林川の邊に至り作兵衛
 國次とて討つる
 有る時其時其時
 兵卒始めて其進るるを
 知つ已あて本陣に
 亂入す手とて國次右方
 小迫つんとせしを前かき
 て水鏡し其れ南九と
 討つるに其れ其れ大敵と
 るるに其れ其れ其れ
 山崎の戦場に出るに後守河原高き
 土をく其れ其れ其れ其れ
 破して立居自在を先陣に馬騎の
 高き其れ其れ其れ其れ其れ
 或の秀長あつて天野源右内と改め



弄存亭有人紀

朝家横芳炭画



太平記英勇傳

一惠齋 芳幾筆

明智日向守 光秀

廣幸



山今亭有人記

此朝倉に仕へる其主ふれども足らざるを踏し義昭公の推挙を得て信長に屬し功有毎に賞を得て丹江兩の大守と仰ぐ是君恩感込身ふ溢れさ會く山山の警應使を命せり是日我すふらいて中國獲兵の先鋒を命じしより光秀怒て幸禮いせと又達復を命せぬ

太平記英勇傳

齋藤 代八郎 利次

山今亭有人記

一惠齋芳幾筆



此朝倉に仕へる其主ふれども足らざるを踏し義昭公の推挙を得て信長に屬し功有毎に賞を得て丹江兩の大守と仰ぐ是君恩感込身ふ溢れさ會く山山の警應使を命せり是日我すふらいて中國獲兵の先鋒を命じしより光秀怒て幸禮いせと又達復を命せぬ

廣幸

山今亭有人記

一惠齋芳幾筆

廣筆

太平記英勇傳

山今助晴幸入道

遣鬼齋

鬼を斬て諸葛
大と呼せし諸葛
鬼を往古と忍び三州
牛座の乱を逐て用
寂を愛せし信玄
招き禮を以て
一徳齋後説ふ治乱を
明ふせしを免張て

漆のりし時ハ永
禄九年秋九月信玄し本
策を用ひ六月二隊をもち正
兵とて西条山を
奇兵とて川中島を押出
せし其謀信共策と



六十七

推さるを
以て謀略
瓦解とあり
遣鬼

軍に
憤戦と
討死と
あり

太平記英勇傳

佐く陸奥守成政

成政武勇とて越中の跋扈一
敗く三命を拜さし豊公十万の
將としてこれに伐成政利中へ

降参し九州攻め功有と以て
政行傍よりよろこばして肥後一國を
賜ふ成政恩を感して成政

黒き百合七献を政所
奇也と定規と請て茶會
と催さんと涙とを其説
と聞知人をして黒百合を

取寄しと政所ハ成政が仕業
とんと思ひ辨にんをく
誅し一擧の鎮々を罪
に死せらひて斷絶せり

弄月亭有人記

相馬坊芳幾筆 廣筆



五十六

太平記英勇傳

豊臣秀吉公

父を弥右衛門と号し、幼名日吉、後小幡長吉、藤吉と更む。永祿元年秋九月、信長あはせ、さき同十二年、始て村田に烈し、丹羽、皆田を破、武を慕ひて、羽柴と改め、以下、日吉を以て豊臣、遂に四海を掌握し、て、宣使、人臣の極み、赴る、然と至國、秋、ら、諸將の恩賞、宣行、あふ、不、是、とて、三韓、屬國の、礼、を、失、ふ、を、名、に、し、將、を、令、て、之、を、伐、と、し、輝、峻、さ、る、に、慶、長、四、年、港、ト、さ、る、初、と、豊、國、大、明、神、と、号、せ、る、を、り



弄舟亭有人記

朝雲揚芳幾重

廣幸

山今亭有人記

一惠齋芳幾重

廣幸

太平記英勇傳

淺井備前守長政

世々近江の國、主京極家の臣、祖父亮政國と、掠奪、し、西、近、江、一、城、を、築、く、長、政、の、膽、畧、祖、父、の、越、近、國、の、許、に、也、一、長、將、と、う、信、長、と、妹、を、送、つ、く、親、を、通、せ、か、と、久、政、義、に、あ、つ、く、義、景、と、う、子、を、交、え、ん、と、議、す、信、長、と、于、戈、と、交、え、ん、と、議、す、子、に、し、て、父、あ、及、く、の、道、を、く、且、戦、ひ、且、破、り、て、家、室、三、女、を、信、長、に、返、し、助、命、の、使、者、三、度、あ、及、べ、ど、唯、辱、志、を、の、謝、し、て、自、殺、し、た、り



二十五

太平記英勇傳

千石權兵衛秀久

豊臣家隨一の強勇秀吉
四國を伐ちし諸將を
三隊に分ち秀久の
讃岐より入る前軍の
進んで諸城を拔き
四國平定せし及んを
讃州を賜ふ會々九州の
義久我意不はつら
王命を拜み久故み秀
久使者にして其罪を
向ふ義久怒て秀吉を
罵る秀久安治義明と保
義久と戦ひ利ありて豊後の
走ら秀吉其意忽て責て邑を奪ひ尾藤
知定平下つらと小田原陣功りつらと以て信州
小室の地をりつらと五万石を領せり



秀久亭有人記

朝霞楼芳峯画



太平記英勇傳

北條左京大夫氏康

左京兆氏綱の強勇祖父早雲
三世相傳て其門と高きと中
氏康武勇果敢祖父早雲
三つ四つの子を以て西上杉
四方の大軍を以てつらと
利ありて朝定せり
憲政を定むる潮左
八州を掌握し
兵威漸全に
振ふるなり
武勇の將也
和号を以て秀康多し或年の
奥高橋に登川て涼風を待は宵
城北小旗のちから変あさくおひ
臣等眉をひそめく不評を忌む
氏康取敢て一首の和歌をそのまき
らん人の我を死つら方に死したるこそ
まの命



秀久亭有人記

朝霞楼芳峯画



太平記英勇傳

明石儀太夫秀基

儀太夫ハ光秀の臣なり四王天但馬と
 記ハ命と奉トて尼ヶ寄り
 理伏一秀吉中國よりをせ
 赴るとまのりて討んとをきに
 黒田孝高もつと光秀の
 臣等おむくをりまると
 以てこもれどとこさすらむつる
 四王天ハ清正の爲りうとこ
 今ハ討死と覚悟をうしし
 復おもつとく銘をうしし
 相殺るん主君秀吉ハ生死を
 あつむをりこと組語もす
 去やもつとんさ極の口と
 今つてく京にのう光秀に
 賜いで首託せりうり遂か
 辞せ一首とをいとくつさ
 よく自殺せりまう

山今亭有人記

一惠齋芳幾筆

廣幸



山今亭有人記



一惠齋芳幾筆

廣幸

四五

太平記英勇傳

鈴木飛騨守重幸

源九郎義経の
 臣三郎重家乃
 後世也紀州
 藤代山の
 藤小住
 石山殿
 人の憑
 應
 長
 勢を破
 秀吉を八
 化の備に
 謀罪實に
 子七救く
 其難克と
 遂に行死



遂に行死



太平記英勇傳

井上大九郎

大九郎いまだ浪人の頭合に
 通て仕置とまさん衣服さなるく
 徒小銃一て死せんうり率斬取
 まるんじりと酒店小酔る武士
 や剥んと做るふ罪のふあふ
 木村又藏多れ八百太富逆突戦るふ
 清正のふ初るるる見と一く
 此たふ来くを面士を宥りて中へ同い
 全ゆるく其責を扶りたるを
 大九郎恩不感しく清正を従ひ
 勤功奉てかそく色清正卒一く
 大坂入城一
 元和元年の
 夏討死
 せり



弄月亭有人記

朝霞橋芳後画

廣幸



六十

和田 伊賀守

惟政

徳川高祖の城をさじ義輝
 七ヶ條諸將を討つて
 惟政は谷川に戦て三ヶ條を保ち
 義輝義興を養うて後身と成て公家
 扶け義昭信長を助るるをこれと
 して浮き代推の鳥さふ落城させしめ
 惟政今我々のと専ら防備の備と成し

太平記英勇傳

弄月亭有人記

朝霞橋芳後画

廣幸

村重
 徳川守のしん度をもて是討つたじの
 其御清考を養うて惟政と成らるる



十六

太平記英勇傳

後藤之英衛基次

祖父美作國... 後藤基次... 父市正... 弟高千の如く愛... 以て高千の如く愛... 破て藩を生とう朝新... 浪人して九州ありとぞ

太平記英勇傳

松永彈正

久秀

原東京師の産... 松永彈正... 三好長慶... 後左道政康等... 大和半國... 城を以て降参... 信貴多門の両... 城を以て降参... 城を以て降参... 城を以て降参...



廣幸

全二



十四

寺存其テ有人紀... 納家揚芳幾画... 廣幸

太平記英勇傳

鈴木

豊人

紀州雜賀の住人
鈴木孫市の子
人九才の
新父石山
ホシノ龍て古跡
音信ありし
一年軍勢僅保る爲
雜賀を戻れ我が家
同を豊人慮く凡武士の子
首父を戰場に赴く安用して居べ
つらばと潜る石山を登りんじて敵兵を擧げ
不思議一人の老法師豊人を負て石山より去る

再存亭有人記

九十
朝露樓芳安重
廣幸



後筒井の勇
臣小林團藏と戦ひ
仏カマを於て小林と
討取

太平記英勇傳

龜田大隅

父六溝口半左衛門
大隅始め半之丞
と呼て伊賀守
勝豊に屬し
十六歳の初陣
中へ越前白鬼女の
大功を顕し名を
權に仰と更賤を
の後朝松永正が仕
大隅と朝松朝鮮後度の
戦に主人幸長が従ひ
清正と俱に蔚山の麓
教日糧小尽るとりるも
屈せぬ遊の明軍百万の
圍を破敵將六人の首を
得て加藤三千石せよる

廣幸

再存亭有人記 六六 朝露樓芳安重



岸田

光成



太平記英勇傳

後五奉行
の一人として合部
少輔と云慶長五年光成軍を起し
敗軍の後江北古橋村に生かすも

一惠齋芳幾筆 廣華



山公亭有人記

一惠齋芳幾筆 廣華

太平記英勇傳

安藝中納言照基

大江廣元の十七世式部十郎基成
始め吉田三百貫より出武田三村
御尼子に亡く十國を領せ
長子隆基早世一子色を
其子照基家職を継ぎ
武略祖父基成より
秀を始め永録八年
基成大率
出雲小入り富田
の城を責人とす
時照基若川元長と
争つて富田を攻んと請
基成奮踊一字実り
香孫のりといふ累年
秀吉と成行一四ヶ國合領
して百廿万余石を喰
大老の一個



太平記英勇傳

音川兵部大輔藤孝



月亭有人記 十二 朝露樓芳幾画

山今亭有人記 一惠齋芳幾筆

太平記英勇傳

明智左馬助 光春



打出の窟ありて
血戦し衆皆討つに及ばぬ地を
争ふる湖水も東入りしるるる平地を
往とて巴あして坂を八城に名を
鑿り秀吉に逆り家室
長岡齊水と俣の自
その勇人か
その勇人か

太平記英勇傳

秋坂中勢

大輔 安治



始め浅井長政の臣
秀吉其勇を愛し清正且元
等命して捕じ竟に説て臣と
爲し一世的勲功故奉命送りて
御方若くは越の勇士神戸水野の両將を
與伏高根未越中攻まふ功有て必拱州
能勢を石と賜以又和州高取を移し又石を
三石を領する一年三度三倍の隊止例せし
其の支の丹州の亦并に討て得たりと云

朝霧橋芳炭画 廣垂

九十六



太平記英勇傳

佐々木六角兼禎

佐々木義秀幼雅なるを以て叔父
左衛門義賢後見して國邊を
主要へ入道と兼禎と号すと
永禄三年越前今川年拾の
折り秀吉江朝小
使着に之を知りて
むよ兼禎これに
許さざるは兼禎
六百の正前あり
會つて判義昭三好松永
逆とせし江朝兼禎富直
三年子義朝三好につら
義昭と討んとはらうく義昭若門ふ
逃る越前小宮めら美濃ふ動座す
是ふをいひ信長共とせらうく
先兼禎父子と號て上洛の原路を
おろしんと兼禎和田一季ふ
兼禎おそれて降をこひて再度
殺さる歎さんそらうぬ



朝霧橋芳炭画



朝霧橋芳炭画

十

太平記英勇傳

亭有人記

一惠齋芳幾筆 廣幸

直江山城守兼繼

長尾家の臣景勝を扶けて國政を執
 勝家成政ホと戦ふ累月介とも先
 考の威名を勵め老秀吉喪主となりて

右市の盡骨の苦行の目兼繼主に代り
 是レ帝以後天正十三年秋八月殿下
 成政を撃つて越中を定め越後の國
 兼魚川に陣をとる時景勝ととも
 命を拜し翌年五月京の朝
 景勝の参謀り兼繼は朝敵太夫
 と方り其外叙任を待つ者五人のみ及り



太平記英勇傳

四王天

又兵衛
 政明

上馬守
 子武
 雨龍
 倫の
 士人
 香
 本龍
 寺入
 押奇
 一
 かの入
 らんと
 鎧長
 以て
 寄手
 左右



弄舟亭有人記

朝霞橋芳幾筆 廣幸

太平記英勇傳

石川 兵助 貞友

山合守有人記

忠齋芳幾筆



秀吉荒小姓の
一個のう賤ヶ七郎の
我ひ北越の
勇將安井左
近兄弟とらう合難多く安井と
討取しと拜郷五左工門拵とを
共助目もろ突くも亦從ふ兵士七八
騎鎧先を所久く突戦る手にそ
終み多勢ふ敵一へく柳ヶ潮の

雲と
名は未代り
芳



太平記英勇傳

坂井久藏尚恒

右近高政の子年十五才の
初陣は建部源八郎とを
近江守の極勇と討
取後舞川の役は戦
井家

朝露樓芳幾画
弄存亭有人記



太平記英勇傳

小田上總今信長

備後守信秀の長子父の某家を
継ぐ長三郎に封じ其時義元
頼朝三男四男を卒し尾羽と
信長を上洛の道とて以つたを
信長舟中東の舟に乗りて
守らざるに
守らざるに
千餘を仰ぐ出陣
をすす及び然るに
舞をむしりし暴風雨に東して
同道を走らざるに義元と某家
心伊勢と定め美濃と平治し深井
朝倉をむしりて居て西に安土に移し
中國を版さんと某家秀吉をつら
横河に赴きて洛の本陣寺と據りて
夜光未の逆謀を遂げり
大ヤとちちと自殺し
ぬん時小四十九才
ありとを

山今亭有人記

一惠齋芳幾筆

壹



山今亭有人記 卷三 一惠齋芳幾筆 廣筆

太平記英勇傳

浮田

中納言

秀家

兒島三郎
高徳十代の
孫祖父能家
島村彈正の撃れ
父直家十八才にして敵
彈毛を討一時其名を清り
せしも 竟る逆心とて殺し
主君
浦上宗
景と

官一男中
山算後
毒殺して 従以後秀吉に
備作二刑を 屬し行程も



病世
秀吉
八郎秀家
と撫言し
長を及て
三位黄
門に任
慶長五年
敵を原
戦ひ不
後伊豆
流す

湯淺 吾助

九州の出生する
は推し大谷
吾助ははく
三千石を領せり
慶長五年の
戦ひ主人の命を
救ひ主人の命を
して諸軍の下知を
傳へて七百の小勢を以て
秀秋が二万余人を打破
其他敵陣を撃つて突戦
做せし朋友次男討死し
吉原を自ら殺せしを首級を僧の祐女に託して
高野へ送り今心易しと高野のふ討死せしを

太平記英勇傳

吾月亭有人紀 廣幸 朝亥 檜芳 炭魚



太平記英勇傳

別所小三郎長治

播州三木の城主としての赤城義祐
の寺政職ホと計り義備の猛らうと
患ひて信長に通つて吉
中國を向うころは無二の
味方なりし後信長に
味方するに色をわらふ
是におつて近城過半
長治は應せしを秀吉に
言んとき年に堅固ありて
空を落つておつた山路舟路
隠て兵糧の運送を断つて
城兵大に屈し竟し人馬草木を
食ふにのさたり長治今これこそ
かゝるに士卒を助命するんやと
伯父山城秀友之ホとるに
自殺なりとるを



吾月亭有人紀

朝亥 檜芳 炭魚

太平記英勇傳

毛受莊助家照

堀河春日井郡榑葉村の
産功少将勝家公にまを
連重比羅は元正五年の
冬勝家長島に渡りし
時ありあつたに御幣の指物と
奉りまはした
翌年重比羅は
討つて家照死す
謀て御軍の出入敵討せ
撃て逐ふ指物をむかう人
同一年賊ヶ嶽の役盛徳家
の令を用ひて御軍の北軍破りて
重比羅に御幣皆送らんと
御幣に勝家公の御名を
御前御請く主の名を
御幣に記し
名を後世に
傳ふ

弄月亭有人記

朝宮撰芳幾画



三十四



太平記英勇傳

堀久太郎 秀政

山今亭有人記

一惠齋

十七



廣幸

太平記英勇傳

武田大膳大夫晴信入道信玄

新羅三郎義光の男河津三郎甲斐守武田信玄
氏を天多子七代信虎の嫡晴信村上
義清と連て信州を襲へ彼を討つ
謙信と針看め及連十二年更ふ益と
をこゝ処きり多互ふ勇士を出し
組討を倣へ信州の四郡を降さ
加の有らざるを約しその如く
あつた意も起後の有らざる後
駿河に兵を出し九城を一陥入と
天正元年四月信長と戦んと勝
來寺の陣を一時病奪へ活べり
さうを以て諸將を兼て後吏
を討つ一々作て意か辛を
臣等表を懸へて國を
歸さ示傳ふ野田の
城を攻つとり名節か
間處と鉄地ふもろそ
落今もすともいなり
然つものろや



寺存亭有人記

朝露樓芳安画



太平記英勇傳

坂井右近尚政

織田家流の臣軍功奉て
教へじ姉川の役を父子共
と討つ同し道ふれん
世と臣等の諫ふ漸
陣没と止り信長
決井朝倉と戦つ
權を對陣の折柄
尚政將にて堅田
寺の板を兵糧と奪
て先敗を奪との意も
長政軍應ふ長せ一政
大軍を以て
不意の堅田を
圍へる術計
妻の冬を以て
竟ふ討死
いこのろや

山全亭有人記

一惠齋芳幾筆



太平記英勇傳

嶋左近友之

和川の起
首井頼慶
三家
老の
一個體界俱小方より
山崎の役齋藤利次の
奇密をさしやう
長刀を執り利次を
討主を扶く功をさす
幾手あるとて下代頼慶卒に
其子定次の不行義を諫る
辭して田を樂まんさせし
三成良ホ四万石を食一頃掃く
二万石を以てとりのり竟ホ三成比
巨とらり濃州大垣ホテ
物退亦をその外
軍功甚多し



朝家操芳幾画

弄舟亭有人紀

四十

太平記英勇傳

齋藤山城入道道三

山城の甲斐前名松浪左九郎との
家振て自らなれ常ホ水油を賣り
業しやうその傍に歌謡を善し美濃ホ
越て上流頼隆の家老
長井藤左衛門村山信智
と以て登庸し竟この
封を段して契地を領し
赤穂藩を遷りて關の守り
白ら山城守と稱し稲葉山ホ
入城して列侯の儀あはる城田
信秀と親しく女を娶て信長の
家室と始り信長通三を見るは日行
異跡あり一の家老ホ部信忠もえく信長の
郡信田合漢七五三の飲食にあはるせはと番大の
創番とそらふとてあり信長封内ホ入ると
むせりく衣冠せたるは道三の調子
巨等ホこの調子ハ七五三せり人ハく難きを
道三嘆して我々國ハをぞにむと引出りのみふらん
のハハとて言の如くちやうなる



六

弄舟亭有人紀

朝家操芳幾画

太平記英勇傳

加藤 主計頭 清正

豊公母方の 從子幼名を 虎之助と号し 一世の戦功を 著し 中朝 先達もも 元良 呼んで 王子と檢て 蔚山を 奪て 大明の 存を 明人 懼て 鬼將軍と 唱へり



廣幸

五十

一惠齋芳幾筆 廣幸

五十九

林半四郎政俊

明智左馬の臣が量敵十人 に対せり 山崎の戦い 主君 俱不安土にあり 光春戦ひ 心りとなく 半時と卒し 援兵 不起り 半途は 城を 攻め 出さず 兩軍 かく 挑戦 從ふ 兵士 皆討れ 北春 湖に のり 入る

武俊 今を 承る 怒り あり ちり けり 敵を 退く と ともに 湖水 舟 懸入り 實目 さぬ き

太平記英勇傳



あり

太平記英勇傳

堀尾茂助吉晴

在原業平の孫
堀尾忠左衛門の子
堀尾仁三丸と号す
尾羽岩倉山落城の陣
勇戦して敵を多色
少時山林の窟をむすむ
秀吉稲葉山の岡道を
破つたかよひ古指懸て
堀本とくさしを
茂助とちりせりつて
暴にもせり秀吉
あれをいふべき事には
實に驚の記とて田舎
古時業平の稲葉山と
帯見より以来を
抜く功を立つて
織千代らをあはれのち
遠別濱松十二万石を領し
中老の一人なり



弄月亭有人記

朝露樓芳幾画



三十三

太平記英勇傳

花田左衛門尉

滋野雪村

安房守昌雪の二男母ハ
宇多下野守の女永祿
十一年戊辰歲信州ふせ
妻ハ大谷吉隆の長女なり
豊公他界の後紀州九度山
村ハ父昌雪とらに隱居をも
細細と書しそむさびらし
常村討死の後、彼九度山村の
宅地を二箇乃淨刹となす
地藏菩薩と安置し
庭上ハ洋園を高懸く
大光院日道光白と



弄月亭有人記

朝露樓芳幾画



八十

太平記英勇傳

會津黃門景勝

源信の姉長尾越前守政景の
 孫のしを源信養て子とし始メ
 善平治と号し是より疾ハ
 源信並余氏政の弟を
 叔て子とし
 旧名と号て景虎と
 命し源信卒て
 後三子國を
 率ハ國人黨を
 相て相攻を景虎カ
 屈て自終一景勝
 源ノ家職を地武成
 尚先考の如し
 天正十四年五月
 京師に出て秀吉と相す
 是時參謀任ト復黃門に昇
 進し居て會津に移さる



弄月亭有人記

朝家橋方安五廣幸

山今亭有人記

一惠齋芳幾

太平記英勇傳

菊川治部大捕元春

藝州山形郡新城の城主
 菊川貞常の養子實ハ
 元就の三男大江
 三家乃一人
 爲人豪直
 以て膽略有り照元
 隆景高松の役に秀吉と和を
 做せと獨り元春不可秀吉志を
 得たに其下み出るとも
 長子元長を嗣らして隱居ハ豊公
 九州發向のより西討ハ重支方を
 元春老より雖先鋒を命せりと
 依て諱もつるに先途に



太平記英勇傳

朝倉左衛門尉義景

原日下部氏世々斯波武衛門任文
 文明の年中其裔敬景自立く
 越前を領し始て諸侯を列し
 教化を經て義景にいつる
 性暗弱ゆへ天下ふ
 功を立ること
 能く會々
 義昭越前に
 倚れと謀るる
 足をとつて美濃ふ朝屋を
 信長志と得るにや久
 朝倉は多年の怨敵を以て
 越前ふ軍馬と殺せしる淺井
 長政旧好と業を俱信長と戦ふ
 時天正元年秋八月義景小谷を
 據て余吾の湖を陣し戦ひ破て本國に
 奔て遂に灰山の城中に自害するを

義景 弄府亭有人記

朝倉操芳後画



太平記英勇傳

糟屋内膳正政則

別所長治の臣糟屋助右衛門の子なり天正法政の
 前夜助右衛門密に空田の陣に来りて推の子を殺し置
 けり孝高の心に討死はせり孝高は其義勇を
 感て地有る
 成長て人の舊名を
 呼せ

山全亭有人記

一惠齋芳幾筆



太平記英勇傳

山全亭有人記

一惠齋芳幾筆廣幸

新侶武藏守唯氏

遠く先祖を慕ふる者
 頼朝の忠臣當麻太郎忠基と
 云ふ者源二位ふく、源義経を
 惜み死を省めく薩摩へ
 流せしむる子品津家の
 仕え年七經二隻四百余年
 せし過る事十三代末の
 唯氏に至る古今獨歩の
 強勇は、今常み廿八の自の
 鐵の延棒を以て敵中を豎
 横せり豊公九州を一掃と
 之をも獨り唯氏服従せし
 事二十七年卒し其の
 帰路を討んとし豊公
 大勝多くと感して大隅の内
 一郡を以て之を



十三



太平記英勇傳

八世管與六

正勝



新波羅米守高橋の
 後継世に海東郡
 八世村正と云ふ
 公幼雅くはるる
 正勝の
 家に
 若先
 してせふ
 出る相ともう
 約其身信長に事え
 正勝と召す以下今川と

一國を以て
 十七万石余
 と食し

弄月亭有人記

朝霞橋芳幾画

廣幸

七十八

太平記英勇傳

楠七郎左衛門正具

楠延尉正成の遠孫
北畠具教乃虎下
武勇策略にも
先祖と羞光
信長伊勢軍馬を
發し諸將をかそく
戦ひの術と失ひし
正具及間を以て信玄
尾及と蔽ふと云せし
の卒に軍中騒動
信長帥を復て其謀言
るを後再度發
向して諸城を治せし
獨正具謀略をわして
屢々破り信長伊勢を平定
及び辞して本願寺に入る



山今亭有人記

一惠齋芳幾筆



九十一

太平記英勇傳

清水

長左衛門

宗治

郡家無類の忠臣
秀吉備中へ入て高松を
圍む邊の上堤を築き
兄弟血水大堰の三川を
堰入るる時

山今亭有人記



九十一

線月の季さるりのうら
水はさくく岳とひさし
城中が屈して唯水窟と
なさんるを歎め宗治
自害して士卒と取命せんと
使者を以て言入るに秀吉是を
許して堀尾吉晴を檢使とせしめ
宗治最期の一曲を奏一首を誦す

太平記英勇傳

齋藤 伊豆 三利 守



山今亭有人記

一惠齋芳幾筆

身の丈一丈余の明術と謀計を以て其の敵を討つ

内膳三浦 齋藤伊豆 三利守 正徳二年 朝朝の役

太平記英勇傳

中川瀬兵衛清秀



山今亭有人記

一惠齋芳幾筆

中川瀬兵衛

荒木村重の部下、田原の歴下で、後村重と保。信長が従ひ、芥川の城主。和田惟政にも勇悍の將である。衆の推して是を撃ち、他の軍功比類なく、天正八年信長播州三木を清秀と共々討ち、其子秀政の信長自を殺し家を新造した。戦中、高山友祥と先鋒を率ひ、勲功尚群を秀と英逸のあき。

太平記英勇傳

齋藤竜貞

道三不義義竜不孝
 若竜貞の身ふりや
 信長の為不國をうし
 投州に逃れく三好に寓ま
 越前に於て朝倉お客さ
 義経酒ふんちり
 瑞府のれ同氣相求て
 竜貞と愛しその臣
 前渡九郎共闘をせ
 取て竜貞のふり
 取波怒く余吾の神中
 よう信長に降る義経
 かそれ木蘭の退く信長
 兵とさうちて進出竜
 乃山ふかひて迎る竜
 貞討死して義経を
 其母その母長井人
 討し此御竜貞今三年
 早うせの事今日らん
 多く小錯多うり



太平記英勇傳

伊木半七

赤吉軍を
 復す
 北軍
 乱して
 敗走せ半
 七例の大
 太刀を



立佐久間勇
 臣大奇團右工門を
 討て高名を
 ついせおの
 半七及び兵助左吉ホセ柳ヶ瀬
 の三振太刀と称美し

弄存亭有人記
 朝露樓芳幾画

太平記英勇傳

今川治部大輔義元

建武中今川國頼時と駿州小受
連時たつて天下二世義元も至り
連時たつて天下二世義元も至り
連時たつて天下二世義元も至り
連時たつて天下二世義元も至り
連時たつて天下二世義元も至り
連時たつて天下二世義元も至り
連時たつて天下二世義元も至り
連時たつて天下二世義元も至り
連時たつて天下二世義元も至り



山今亭有人記 一惠齋芳幾筆

太平記英勇傳

左枝 犬毒代

尾州荒子の城主殿殿也
利高の六男なり、改まる、信長の
勤王に受へ、義元大將の一と
尾州の地と賜はるは、是れ、討死す
北條の勤王を討つる元と九根
の治部佐次郎大守と名を
分ける事とす、し、勤王を斬ると
廿八人に、其勤王を討つる及び
大毒代に功を賞し、一、鎧と賜
名を、四郎と改め、後又是門
年家と名を、く、原來
赤七郎と名を、す、友とを
以て、稱する、其、功也

▲立つ支幾子もろと
▲たつて天下大老の一人と
▲六十二才のや
▲卒す

山今亭有人記 一惠齋芳幾筆

三十三 廣華



太平記英勇傳

庭五郎左衛門 長秀



秀吉実徳あり
起り神の自見
上小出と金其谷
量し重し 意を屈せ
是不従ひ秀吉大志を得
及信雄と海を渡其し長
秀意中に怒秀吉を除て藤田氏
と與えんと做と藏現察し
晩幕自由を得此と吾

朝霧橋芳炭画 廣幸

七十



太平記英勇傳

荒木振津守村重

村重へ公方の御味方として武勇世に
許さし列持り公方信長に親まき
大津瀬田小菅と築きし信長
光秀長秀ホレと是と討せ自ら上洛
去ぬ人の時村重藤孝と僕不逢坂小出遊
請て振津守とを以信長偏かり
饑頭と貫き村重を自先小出を
と悠然に是と食を信長その
勝力と賞し振津守とあるなり



秀吉実徳あり

朝霧橋 芳炭画

三十八

廣幸

真柄十郎左衛門
直澄



太平記英勇傳

越前乃國主朝倉の勇臣
なり其父虚弱を性より以て天に
物言て天方の男子を教ふるをん変を願ひ直澄を
産り怪力百餘人へ對し同國千代鶴則綱を銀さる九尺
五寸に幅四寸重千二百四十八分十八日の大太刀を振ひ向所
不勝と云妻を伴ひ彼物川の戦ひ碎る色勇將
卷田ケムア
討死せり

太平記英勇傳

平手監物

平手 中堅の嫡子二世相もんと
登田の軍師より香吉郎より
登庸して自己が右に出んるを
偏執し茶田佐久間に請う
陣列調練と号し木下
威をこころんる信長
許して互に兵士五百
と号し平手木下
これに將と廣場へ
ついで調練多すに諸撃
さうに秀吉おあはれ
平手木下先く木下
凡そさうとさうめ
意を設けて藤吉も腹を
鳴呼らるつゝ改むるにさう
ありその先言々にあはれること

今

太平記英勇傳

竹浦生

宰相

氏郷

江州日野の城主
蕭生定秀の嫡子
賢秀の子なり父賢秀
信長に屬せ一頃ハ忠三郎と
喚び十三才より信長その
兒をさうと見て算を
果し之膽思俱ハ
抽擧忠尚次
わつ小勢州松坂十二方
石を領せしを後天正

弄舟亭有人紀

朝家橋芳炭画

廣華

八十四



太平記英勇傳

古早川

左衛門督隆景

大江元就の孫
安藏の國沼田の城主古早川
正平の養子なり
弘治元年歳

弄舟亭有人紀

朝家橋芳炭画 廣華

六十二



太平記英勇傳

山今亭有人記

一惠齋芳幾筆

千廣筆

片桐東市正旦元

近江國の産豊公開原より扈從し智徳尋常より
 徳義無双の良將より勇み於て江北の秋坂を捕え
 賊ヶ嶽の豊島安彦長井の三將を討ち其他軍功
 枚奉るに豊公他界の後幼主と
 守護し辱し肺病を
 碎ころんと謀者多し計儀
 空敷竟る物乞を得て茨木
 住居せり



千五

太平記英勇傳

上杉不識院謙信

山今亭有人記

一惠齋芳幾筆

千五

五

智勇兼備にして
 義兵金鼓の將り始め村に
 善清の影を依て信水と號を
 交ふこと
 累年時永禄四年秋
 九月信州へ入て西条山
 陣起軍已死地不
 入と激信山上に杖旗を
 立てて甲軍の業を推
 密に川中島へ出て本陣を
 撃つ是を以て武田の謀
 略細細一信賢始り道鬼
 以下に討死す後甲越
 和勝成り義清と旧地に
 歸すそれより北陸道の
 長門を以て越前と版さんと
 去り遂に天正六年春三月
 病歿す一病歿
 五日を以て卒ませり



太平記英勇傳

磯野 丹波守 定正

江州名譽の後 徳元

先年神川の戦ひに 長政の先陣にまゝも 磯野の陣將を陣を 本陣へ切へりしと 磯野の陣將を陣を 本陣へ切へりしと 磯野の陣將を陣を 本陣へ切へりしと

弄月亭有人記



朝家橋芳幾画



二八



太平記英勇傳

小西摂津守 行長

父、泉別塚の高 賈小西清兵衛後 知清と号し行長 弟、弥九郎と云

備前 岡山の高人の 養子と云ふ

其姓富 樓那の辨あるを以て浮田 直家京師へ使者といふ香吉その 奇才を賞し請て臣と爲後 朝野の役に清正と俱に 先駆してその功を伯仲せり

弄月亭有人記

朝家橋芳幾画

二八



太平記英勇傳

尼子四郎

勝久

民部少輔致久の男勝久と云く
 泉州堀に在りて山中越之助岸
 左馬助等進出運俗しく四郎
 勝久と名号す本立原龜井
 ホの爲臣と集り雲州に入
 三沢三部屋の國人と從(但馬
 より因幡へ)山名と味方と
 運元と戦ふも利らざりて播州
 走り秀吉に敵ひ上月の籠り
 郡三家と狀戦
 多せと街計愛に
 尽くく勝久自害
 ちく士卒七
 助命させ



太平記英勇傳

長曾我部宮内少輔元親

祖父元春の二條前亞
 相房家へ七家老の
 看頭より二十五年中
 勤作と讃へ愛に
 房家如祖元親と稱
 撫育成長て善器也
 と悉く予し小國親儀
 兵と卒半途はて病死せし
 元親年始て十八父志を継ぐ
 履六族を率り四辺を攻奪し
 て威を國中にあらむ王命を應せ
 ざる変年あり天正十三年秀吉
 自己兵十方に將とす多し諸將と
 向津嶽の三州よりせめあひるり
 元親力屈し自殺せんとせしと秀吉
 その勇を惜み助命しと土佐一國をさへ

弄存亭有人記

朝家撰 万葉集 廣幸



太平記英勇傳

木村又藏正國



惠齋芳幾筆

山今亭有人記

一惠齋

太平記英勇傳

木村儀太夫



尾川春日部郎の産清正末
虎之助と云ふ頃多仕一世の
勲功拔擢を以て違ひ代
朝鮮に渡海して立役
木村又藏と俱に五百の
勢を率いて埋伏し
破り竟に谷山海を指尚不良
合入て貴田孫兵衛と先を率以て入等
拔擢し多勢を以て貴田を戦死せし
故に不能莫速に果す
朋友の仇多うと當の敵を
皆殺して清正の

太平記英勇傳

山路將監満園

此北畠具教が臣信長を討てて
北國の地を賜ふに勝家
如く下り信長平去の後
勝家お屬して養子
勝家が内人として長濱の
在りし勝家城を以て
守りしに勝家は其の於て
將監も御家も守るを
敗つて木山の岩の
り原末將監を助
あれを多欲にて
義を以て盛
招くは貨を
以てするも
包ちこれの
志す
了て吉より秀吉
より引退し北軍皆ぞふ
し加藤清正のさうり討色久



弄丸亭有人記

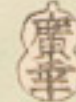


朝雲樓芳幾画



山全亭有人記

一惠齋芳幾筆



太平記英勇傳

佐久

女

盛政



羽軍
敗つて
山路將監を招き
密に余吾の湖を
經て志山を貞拔
中川清方を討て
諸案懼て戦の色を
失ふ此時盛政伯父の嗣を
信じて師とて入る勝利なる
一段小利の討て深入り秀吉
美濃より常春殿と
等しく此軍をよそ
終に盛政生捕とて秀吉

J-C

7

J-C

7